『釈軌論』第２章経節（62）-（63）訳注
―多文化共生の基盤の構築に向けての「法を説き・法を聞く」こと―

堀内　俊郎

１．はじめに

多文化共生[1]のためには、まず、お互いの話をよく聞きよく理解することが必要であることは言うまでもあるまい。宗教間対話でもそうである。「棒にもよらず、剣にもよらず、このように会衆が実によく教導され[2]」たと仏典にあるように、釈尊の教化は、その人格的感化能力もあってのことであろうが、極めて説得力のある説法によるものであったことが知られる。結果、多くの異教徒が自己の執する見解を捨て、釈尊のもとに集うこととなった。これは共生や対話というよりも教化教導の例であるが、釈尊の説法は対機説法、聞き手に応じた巧みな話であったとされ、説法に関する心うつエピソードがいくつも残されている。他方、教法を聞くということの重要性も、仏教では聞・思・修（聞き、考え、繰り返し瞑想修習する）という「三学」が、その順序でもって修行の基本的システムとなっていることから知られるとおりである。

そこで、法（このばあい「法」とは教法のこと）を説き、法を聞く態度が、釈尊在世当時から問題とされた。本稿で取り上げる経文はそれを説いたものであるが、その他、『律』では「説法の行儀」が説かれており、病気ではないのに日傘を差している者に法を説いてはならない、などといった規定がある[3]。そのような行為は「無作法であり、法を尊重する気持ちに欠けると見る[4]」からであるという。聞法・説法の行儀は、後代の大乗の論書においても、「法師」の重要性も与ってのことか、体系化され、詳述されている。

本稿では、世親（ヴァスバンドゥ、Vasubandhu、400 年頃、インド）が仏教の経典解釈の方法を説き示した『釈軌論』（*Vyākhyāyukti*、経典解釈方法論）の第２章から、法を説き、法を聞くことに関して説かれた経典の一節に対して世親が註釈を施した箇所の訳注・テキスト校訂を行う。この箇所は、仏教の教えを説き、聞くという局面に限らず、広く教師と生徒の関係を念頭においても示唆に富むと思われる。もって、話をし、話を聞くという局面においての多文化共生への「思想」基盤、あるいはむしろ「実践」基盤構築への一資料として提供したいと思う。また、本箇所を含む『釈軌論』第２章のほぼ全体が未だ現代語に翻訳されていない状況であることからすると、その意味でも資料的価値もあろう。

２．『釈軌論』について

『釈軌論』の研究史については拙著（堀内［2009］）を参照されたいが、それに含みえなかったものを幾つか挙げておきたい。

中御門［2008］と藤仲［2008］は、世親作とされる『仏随念広注』の訳注であるが、その解釈は『釈軌論』第２章の冒頭部でなされる「仏」に関する経典の文句の解釈にほぼ一致することが指摘されており、訳注が提供されている。

チベット語訳で５章に分けられている『釈軌論』のうち、第１章全体を訳出した二つの博士論文が、相次いで提出されている。『釈軌論』と『摂釈分』の関連は、古くは袴谷［1982］が示唆していたが、これらにより、その関連が実証的に示されることとなった。Richard Nance がシカゴ大学に提出（2004 年５月）した博士論文が、2012

年に出版された（Nance［2012］）。『釈軌論』第 1 章の英訳に加え、『阿毘達磨雑集論』『摂釈分』の英訳も含む。上野（人見）牧生が大谷大学に提出（2009 年）した博士論文は、『釈軌論』の経典解釈法を関連文献との比較のもとで解明し、『釈軌論』第 1 章の訳注も行ったもので、筆者は PDF を著者より提供いただいた。これは同章に多数引用される経文の同定に際し最近年の阿含研究にも目を配って、適宜梵語想定を行うことにより Nance よりも正確な翻訳を提示しているにもかかわらず、残念ながら未刊である。しかし、その訳注篇の一部分を抜粋した訳注が出ており（上野［2010］）、続編も出すようである[5]。

次に、『釈軌論』のテキストについて述べておきたい。本論は、もとはサンスクリット（梵）語で書かれたのだが、オリジナルは現存せず、漢訳もなく、チベット語にのみ残る。李鍾徹（Lee, Jong Choel）によるテキスト校訂（Lee［2001］）は全体にわたるチベット語テキスト校訂本である。これは初めての試みで自身の理解に基づいて概ね妥当な科段分けをしており、裨益されるところが多い。ただ、誤植や内容理解の点で問題なしとしない。徳慧（Guṇamati）による註釈書（VyYT）も適宜勘案し関連文献を精査した上での根本的なテキスト再校訂や現代語訳が必要であろう。本稿はその試みの一端でもある。

3．『釈軌論』第 2 章経節（62）-（63）について

世親作の『釈軌論』とは別に、『百節経』というテキストがある。これは、世親が阿含から 103 の経典の一節（経節）を列挙したもの。103 という数は、李校訂本（Lee［2001］）の計上によるのであり、ここではそれに従う。従って、ここでいう経節（62）とは、李校訂本で第 2 章の 62 番目の経節という意味である。他方、『釈軌論』第 2 章は、その『百節経』に対して世親が語句の註釈を施したもの。これにより世親によって伝持されていた阿含の経文が相当な分量、明らかになるとともに、世親による仏教用語の解説としても興味深い。

その際、『釈軌論』第 2 章の経節の列挙の順序という問題は、未だ解明されていないが探求するに値する問題であろう。世親が 103 の経節を、特別な意図を持たずにランダムに阿含から採集し列挙したのか、あるいは配列には何らかの意味や体系があるのか。大まかな分類は山口［1959：177-178］が行っているが、より詳細な分析のためには本章の全貌を把握することが必要になろう。ただ、本稿で取り上げる箇所についていえば、経典（62）～（67）がひとまとまりであろうか。また、法を説き、法を聴くことは、『釈軌論』第 5 章の主題ともなっている。

また、『釈軌論』にしばしば出る「『アーガマ（lung、*āgama、伝承）』では」というのが具体的なテキストを指すのか、あるいは口伝なのかというのも、今後考察すべき問題であろう。今回取り上げる経節（62）、（63）ともに、経文を解釈する際に「『アーガマ』では」といって『アーガマ』での解釈を引き合いに出す。それら 2 つについては現時点では出典は特定できなかったものの、例えば、経節（64）は『アーガマ』として『瑜伽論』の「摂釈分」（D'i 49a）にほぼ対応する解釈を引いている。また、経節（75）でも「現観」（*abhisamaya）の解釈に際し、「信頼される伝承（yid ches pa）では」として『声聞地』（第四瑜伽処、Shukla ed., 501）に相当が見出せる文を『アーガマ』として引いていることが注意される。

なお、経節（62）では、20 のあり方でもって話を語るべきであると述べ、経節（63）は、16 のあり方で法を聞くべきであると述べる。両経典は、舎利弗（シャーリプトラ）の言として、『釈軌論』第 5 章でも再び取り上げられる。Skilling［2000］が指摘したように、両箇所の出典は *Arthavistara*（パーリ対応なし。漢訳では、共に大正蔵第一巻所収の『広義法門経』と『普法義経』。これらについては Hartman［2004］参照。なお、『普法義経』に関しては、安世高の研究である宇井伯壽『訳経史研究』1971, 276-295 に、経全体の訓読と訳注がある。また、本経の梵本断片が Or. 15009/559 であることを、辛嶋静志先生の Brāhmī Club にて知るに至った。http://idp.bl.uk/ を参照）に求められる。当該経では 20 のあり方の直後に 16 のあり方が説かれ、また、『百節経』で引かれる阿含は、翻訳者の相違に帰せられうる。加えれば、説法の 20 のあり方は『声聞地』、『菩薩地』に列挙されており、『摂釈分』でも関説されている。特に前二者により対応梵語が想定しうる。

【経節 62】

「＜君たちよ、説法者の比丘が法話をするときには、これら 20 のあり方でもって話をすべきである。（１）適切な時に、（２）尊敬して、（３）順に、（４）関連して、（５）随順して、（６）喜ばせ、（７）歓喜させ、（８）満足させ、（９）賞賛せず、(10) 呵責せず、(11) 道理に適い、(12) 伴い、(13) 混ざらず、(14) 法に従い、(15)〔聴〕衆に合わせて、(16) 慈心もて、(17) 利益心もて、(18) 悲（共苦、哀れみの）心もて、(19) 利得や尊敬や名声に依存せず、(20) それらの話を述べるときには自賛せず他人をけなさず、話もすべきである。＞[6] これら 20 のあり方でもって話をすべきである」[7]

とは、経典の一節である。

［解釈 I］

そのなか、「（１）適切な時に（*kālena)」とは、〔聞き手が〕聞くことを望む者であり解説するに値する者であることを知ってである。ヴェーヌカーティヤーヤナサゴートリー[8] のように。「（２）尊敬して（*satkṛtya)」とは、軽んじないことであり、ライオンが飛びかかる[9] ように。「（３）順に（*anupūrvam)」とは、最初の時になされるべき[10] 布施の〔話〕など[11] と、勝れた[12] 話に関してである。「（４）関連して（*anusaṃdhim)」とは、経典を解釈することに関して[13]。

「（５）随順して（*anusahitam)」とは、質問への回答（記別）[14] に関して。つまり、一向記（断定的な回答）などにおいて、そのように（随順して）回答するからである[15]。「（６）歓喜させ（*harṣayat)」とは、信仰を持っている者たちに対して。「（７）喜ばせ（*rocayat)」とは、以前の状態の者[16] と敵意を持つ者（*pratihata）たちに対して。「（８）満足させ（*toṣayat)」とは、疑いを持っている者たちに対して。「（９）賞賛せず（*an-utsāhayat)、(10) 呵責せず（*anavasādayat)」[17] とは、“このような者たちすべては正しく行じている者たちである”もしくは、“間違って行じている者たちである”といったようにであり、『無諍経』[18] に説かれているように。つまり、教化対象（所化）の特殊性を理解することがない者がそのように〔称賛や非難を〕なすことは、それによって教化されるべきではない者が腹を立てる[19] ことになる。

「(11) 道理に適い（*yuktām)」とは、正しい認識手段[20] と相違しないものであるので。「(12) 伴い（*sahitām)」とは、〔話の〕前後が関連しているので。「(13) 混ざらず（*avyavakīrrṇām)」とは、話が他に逸れることを断じているので。「(14) 法に従い（*dhārmikīm)」とは、善に随順しているので。「(15)〔聴〕衆に合わせて（*yathāparṣat)」とは、教化されるべきものに応じているので。

「(16) 慈心もて（*maitracitta)」とは、聞く人が安楽になることを望むので。「(17) 利益心もて（*hitacitta)」とは、彼に対して雑染（心の汚れ）がないことを望むので。「(18) 悲心もて（*anukampācitta)」とは、彼に対して苦しみがないことを望むので。（(16)-(18) に関して）さらにまた[21]、順に、善と不善に直面している者と、〔その〕どちらでもない者[22] たちに対して、「(16) 慈」などの心によってである。「(19) 利得や尊敬や名声に依存しない（*aniśrito lābhasatkāraśloke)」とは、それらを望むことを断ずるので。「(20) 自賛せず他人をけなさない（*na cātmānam utkarṣayati, na parān paṃsayati)」とは、説く者が、自己に対する過度の信頼[23] を望むことを断ずることによって。

その（以上の）ようであれば、１どのように（どのようなあり方の話を）２何のために、３何に似た〔話を〕、４何に似ることによって語るべきであるかが、〔それぞれ〕五つずつによって[24] 説かれた。

［解釈 II］

『アーガマ（伝承)』では、

「11 の過失の対治（治療）に、20 のあり方の話し」

と出ている。

11 の過失とは、［１］器でないものに語る過失、［２］語りを完成しない過失、［３］語りを中断する過失、［４］語りを理解させない過失、［５］語りが尊敬されない過失、［６］適切ではない意味[25] を語る過失、［７］境界（*gocara）でないことを語る過失、［８］動揺して語る過失、［９］無意味なことを語る過失、［10］適切ではない

こと[26]を語る過失[27]、[11] 汚れた考え[28]によって語る過失である。

そのなか、「[1] 器でない」とは、行儀が良くなくいること。一方、「[3] 語りを中断する過失」の対治として、「[3] 順に」などの3つのあり方[29]であると知るべきである。すなわち、説示と、論難の言葉と、回答の言葉に関して。「[4] 語りを理解させない過失」の対治は、第6と第7と第8〔のあり方〕であり、〔順に、〕信仰を持つ者、悩みと敵意を持つ者、中間の者[30]に関して。「[5] 語りが尊敬されない過失」の対治として、第9と第10の2つである。つまり、悪業を持っている者を称賛をすべきではないが、非難しても尊敬しないという過失に陥るからである。「[7] 境界ではないこと」によっては、甚深な意味である。つまり、機根の劣った者に対して[31]。「[11] 汚れた考え」は3種類である。つまり、(i) 信じさせようとする考え、(ii) 信じさせて尊敬させようとする考え[32]、(iii) ねたみの（*īrṣyā）考えで[33]ある。第1の〔考えの〕対治として、「(16) 慈・(17) 利益・(18) 悲」という心のあり方である[34]。涅槃とその（それに至る）道を理解させようとする心と、解説した意味を理解させようという心によって[35]。

［解釈 III］

さらにまた、要約するなら、こ〔の経典〕では、1話の関連、2話の働き、3話の美徳、4説く者の美徳に関して、〔4つそれぞれに〕5つずつ〔のあり方〕であると知られるべきである。

【経節 63】

「＜君たちよ、〔教〕法を聞こうと欲する者は、16のあり方でもって法を聞くべきである。つまり、(1) 適切な時に法を聞くべきであり、(2) 尊敬して、(3) 聞きたいと願って、(4) 不平を言わず、(5) 随順して、(6) あら探しをせずに、(7) 法に対する尊敬を確立して、(8) 説法者に対する尊敬を確立して、(9) 法を軽んじず、(10) 説法者を軽んじないで、(11) 自己を軽んじずに、(12) 完全に知りたいという心を持ち、(13) 一意専心に、(14) 傾聴して、(15) 意を傾けて、(16) 全神経を集中して、法を聞くべきである。君たちよ、＞これら16のあり方でもって法を聞くべきである」

とは、経典の一節である。

［解釈 I］

16のあり方は、13種の過失の対治であると知られるべきである。13の過失とは、[1] 説法者に対して自分自身が働きかける[36]ことと、行儀の過失、[2] おごり高ぶりの過失、[3] 求めない過失、[4] 他の立場をなすことにより腹を立てる[37]過失、[5] 尊敬しないことにより説法者の言うことをよく聞かない過失、[6] 難癖つけようという[38]考えという過失、[7] 法と説法者に注意を向けない（作意しない）ことにより敬わない過失、[8]〔法と説法者の〕過失に注意を向けることにより軽蔑する過失、[9] 侮辱する過失、[10] 利得と尊敬を欲する者であるという過失、[11] 注意散漫（散乱）と縮こまりの2つによって聞かない過失、[12] 正しく注意を向けない過失、[13] しっかり注意を向けない過失である。

そのなか、[1]〔説法者が〕退いている[39]時には〔聞法者は〕行儀がよくないから、第1の過失である。[2]〔自分は説法者よりも〕上位の種姓であるとの慢心を生ずるから、「[2] おごり高ぶりの過失」である。「[7] 法に」とは、美徳と善説と大果（大いなる結果）があることを。「[7] 説法者に」とは、善知識に[40]。「[8] 法に過失」とは、語と文字が関連していないことに。「[8] 説法者に[41]」とは、戒（振る舞い）と種姓と外見（*ākṛti）と単語と発語が完全でないことに[42]。「[11] 注意散漫」とは、心が他にさまようこと。「[11] 縮こまり」とは、気鬱（*styāna）と眠気（*middha）によって心が沈むこと。「[12] 正しく注意を向けない」とは、意図と法性に対して顛倒していることによって。「[13] しっかり注意を向けない」とは、意欲（*chanda）[43]と心的努力（ābhoga）[44]が弱いことによって。

［解釈 II］

『アーガマ（伝承）』では、

「6種の過失の対治として16のあり方である」

と出ている。

6つの過失とは、［1］行為の過失、［2］意楽（希求）がないという過失、［3］尊敬しないという過失、［4］考えの過失、［5］逆しまなものであることという過失、［6］把握の過失である。

「［1］行為の過失」は3種類である。(i) 身体の行為の過失は、行儀よくなくいるからである。(ii) 身体と言葉の過失は、その両者によって要求しないからである。(iii) 心の行為の過失は、聞くことを欲しないことによる[45]。

「［4］考えの過失」とは、他人のあら探しをすることと、このように言い争いすることにより解脱するであろうという考えを持つものであることによる。

「［5］逆しまなものであることという過失」は5種類である[46]。(i) 法に対しては、出離ではないと理解する[47]ことにより尊敬しないことと、(ii) 単語と文字が関連していないことによって軽んじること。(iii) 人に対しては、戒と単語と単語の用い方の過失により尊敬しないことと、(iv) 種姓の過失により軽んじることである。(v)〔教えの〕理解と実践の能力が〔自分には〕生じないだろうと考える人に、自己を軽んじることがある。

「［6］把握の過失」も5種類である[48]。(i) 誤って把握することと、(ii) 意味を把握しないことと、(iii) 文字を把握しないことと、(iv) 明らかに（正しく）把握しないことと、(v) 残りなく把握しないことである。

残りは理解しやすいから説明しない。

略号

Arthvi：*Arthavistara*. D No. 318, P No. 984.

BBh：*Bodhisatttvabhūmi*. Wogiwara, U. ed., Tokyo, 1930-36.

D：*The Tibetan Tripiṭaka, Sde dge edition*.

L：see Lee［2001］.

P：*The Tibetan Tripiṭaka, Peking edition*.

SrBh I：『瑜伽論　声聞地　第一瑜伽処―サンスクリット語テキストと和訳―』大正大学綜合仏教研究所　声聞地研究会、山喜房佛書林。1998。

Sūśa：Vasubandhu（世親）, *Sūtrakhaṇḍaśata* = *Vyākhyāyukti-sūtrakhaṇḍaśata*（*rNam par bshad pa'i rigs pa'i mdo sde'i dum bu brgya*）D No. 4060（Śi）, P No. 5561（Si）.

T：『大正新脩大蔵経』

VyY：Vasubandhu（世親）, *Vyākhyāyukti*. D No. 4061（Śi）, P No. 5562（Si）, Cf. Lee［2001］.

VyYT：Guṇamati（徳慧）, *Vyākhyāyukti-ṭīkā*. D No. 4069（Si）, P No. 5570（I）.

『広義法門経』：T 1 No. 97. 陳、真諦訳。

『百節経』：Sūśa を見よ。

『普法義経』：T 1 No. 98. 後漢、安世高訳。

（その他については、煩を避けるため、堀内［2009］に譲る。）

参考文献

上野（人見）牧生　2010 「『釈軌論』における阿含経典の語義解釈法（1）」『印度学仏教学』（北海道印度哲学仏教学会）25、(71)-(84)。

片山一良　2000 『パーリ仏典中部（マッジマニカーヤ）中分五十経篇 II』

同　2002 『パーリ仏典中部（マッジマニカーヤ）後分五十経篇 II』

斎藤明（代表）・高橋晃一・堀内俊郎・松田訓典・一色大悟・岸清香編著　2011 『『倶舎論』を中心とした五位七十五法の定義的用例集―仏教用語の用例集（バウッダコーシャ）および現代基準訳語集 1』山喜房佛書林。

中御門敬教　2008 「世親作『仏随念広註』和訳研究：前半部分・仏十号に基づく三乗共通の念仏観」『佛教大学総合研究所紀要』15、105-130。

袴谷憲昭　1982 「瑜伽行派の文献」『講座・大乗仏教 8　唯識思想』44-76、春秋社（『唯識思想論考』大蔵出版、2001 に再録）。

平川彰　1995 『二百五十戒の研究 IV』春秋社。

藤仲孝司　2008 「世親作『仏随念広註』和訳研究：後半部分・大乗特有の念仏観」『佛教大学総合研究所紀要』15、131-152。

堀内俊郎　2009 『世親の大乗仏説論―『釈軌論』第四章を中心に』山喜房佛書林。

同　2011 「仏教における共生の基盤の可能性としての『捨（upekṣā）』」『国際哲学研究』（東洋大学国際哲学研究センター）1、129-135。

山口益　1959「世親の釈軌論について」『日本仏教学会年報』25（『山口益仏教学文集・下』春秋社、1973）に再録）。
Hartman, Jens-Uwe　2004　“Contents and Structure of the of the　*Dīrghāgama*　of the　（Mūla-）Sarvāstivādins”『創価大学・国際仏教学高等研究所・年報』７、119-137.
Lee, Jong Choel　2001　*The Tibetan Text of the Vyākhyāyukti of Vasubandhu* Bibliotheca Indologica et Buddhologica 8, Tokyo: The Sankibo Press.
Richard, Nance　2012　*Speaking for Buddhas: Scriptural Commentary in Indian Buddhism*, Columbia University Press.
Skilling, Peter　2000　“Vasubandhu and the *Vyākhyāyukti*　Literature”, *Journal of the International Association of Buddhist Studies*, 23-2, 297-350.

註

（本研究は科研費（若手研究（B）23720024、「世親論書の訳注研究―『釈軌論』第二章を中心に―」）の助成を受けたものである。）

1　筆者は拙稿（堀内［2011］）にて、椎尾弁匡、黒川紀章のいう意味での「共生」の基盤を仏教に求めるならば、その候補として「捨」が挙げられるのではないかと論じた。

2　片山［2000：326］（『法尊重経』）。

3　数は、律によって異なっている。詳細は平川［1995：571ff.］を参照。

4　平川［1995：574］.

5　だが、既に博士論文として提出済みなのであるから一書としての公刊が望まれる。

6　＜＞内は、『百節経』（Sūśa）からの補い。なお、次注では、梵文が得られ、訳注の際に特に参照したので、『声聞地』を挙げておく。『菩薩地』（BBh）も 20 項目はほぼ同じ。『百節経』、『広義法門経』のテキストは、テキスト篇に譲る。なお、徳慧の引く経節とは翻訳がいくつか異なっていることがあるが、重大な異読でない限り註記しない。

7　出典は『広義法門経』。ただ、チベット語訳の方が漢訳よりも『釈軌論』に合う。『普法義経』は項目が少し異なるであろうか。『百節経』と比較されたい。
ŚrBh I, 224.1-5:
tāṃ ca punaḥ　kathāṃ　（1）kālena karoti,　（2）（3）satkṛtyānupūrvam　（4）anusaṃdhim　（5）anusahitaṃ　（6）harṣayan　（7）rocayan　（8）toṣayann　（9）utsāhayann　（10）anavasādayaṃś ca　（11）yuktāṃ　（12）sahitām　（13）avyavakīrṇāṃ　（14）dhārmikīṃ　（15）yathāparṣan　（16）maitracitto　（17）hitacitto　（18）’nukampācitto　（19）’niśrito lābhasatkāraśloke　（20）na cātmānam utkarṣayati, na parān paṃsayati/　（evaṃ dharmadeśako bhavati/）

8　ka tya’i bu mo smyug ma can: Skilling［2000］はこれについて「Cf. Mvy 3798 smyug ma mkhan = veṇukāra」と註記するのみだが、本箇所の出所は SN 35.133（SN IV. 121f), SA 253（T2.61b）：Verahaccānigottā である。そして『赤沼辞典』756b はこのパーリに対するサンスクリット対応語として Vairakātyānīgotrā を想定したが、Chung［2008］によれば対応するのは Veṇukātyāyanasagotrī である。文献もそれに詳しい。なお、この経には、Veṇukātyāyanasagotrī がウダーイン長老に説法を聞きたいと請うたが、初めは自分の方が高座に坐るなどして態度が悪かったため、説法しなかった。後に態度を改めたため、長老は説法をしたことが記されている。

9　mchong ba：Lee は mchod pa（尊敬する）とするが、諸版は mchong ba（飛びかかる）である。いわゆる「獅子借兎」「獅象借兎」（『漢語大詞典』、s. v. 獅象借兔、皆用全力）で、ライオンは小さな動物に飛びかかるにも全力を尽くすということ。出典として、たとえば、常盤大定篇『仏教要典』（博文館、昭和８年）974 は、『華厳経』「普賢行願品」第十二を挙げる。

10　dus sngar bya ba: *pūrvakālakaraṇīya. 『声聞地』にこの語が見られ、その直後には、次第説法と四聖諦の話も出ている（声聞地研究会［1998: 222-223］）。『釈軌論』第２章でも、経典（99）の解釈中で、この二つの説明がなされている（Lee［2001: 152-155］）。

11　施論・戒論・生天論の「次第説法」を指す。

12　yang dag phul can: *sāmutkarṣikī. cf. BHSD. 四聖諦の話を指す。『釈軌論』経典（99）への解釈中では、「聖諦の話が「勝れた〔話〕」である」（VyY, D84a4, Lee［2001: 154］：’phags pa’i bden pa’i gtam ni yang dag phul can te）とある。

13　徳慧は、「諸経典を解釈することのためにである。関連はまた、２種類である。つまり「前後の意味の関連」と、「前後の順序の関連」である。この２つもまた、〔世親〕先生が後に解説する」と註釈している。この２つの「関連」については『釈軌論』第３章で詳細に論じられる。なお、経典（62）（63）に対する徳慧注の対応箇所は VyYT, D 207a3-, P 78a5-.

14　dri ba lung bstan pa: *paripṛcchāvyākaraṇa.

15　徳慧は『倶舎論』（AKBh, 292ff., ad AK V. 22）を引用して、「四記」を説明している。これは質問をより明確にしてから回答（記別）することを説くもの。すなわち、「①“一切の衆生は死ぬのか”といわれたなら、死ぬであろうと確定的に（一向に）回答するべきである（＝一向記）。②“一切の死者は、〔死後に再び〕生まれるのか”といわれたなら、煩悩を持っているものたちは生まれる。煩悩を持っていないものはそうならないと、区別して回答するべきである（＝分別記）。③“人（趣）

は劣っているか、優れているか”といわれたなら、何について（何と比べて）問うたのかと質問して、回答すべきである。もし、神（天）と〔比べて〕というならば、劣っていると回答するべきである。しかし、悪趣（悪しき生存領域）と〔比べて〕というならば、優れていると回答すべきである（＝反詰記）。④“衆生は〔五〕蘊と別か別でないか”といわれたなら、捨て置く。衆生の実体はないので（＝捨置記）、石女の子が白いか黒いかの２つの〔質問の〕如し」と、徳慧は説明している。

16 sngar gnas pa: 仏教に対してなんらの知見もない者ぐらいの意味か。

17 第９の項目には、興味深い異同がある。まず、『百節経』には否定辞 mi がないが、『釈軌論』第２章の世親本文と徳慧注は mi を有する。『広義法門経』は、チベット語訳では spro ba dang、漢訳は「正勤」と、否定辞がない。『普法義経』は、前後の関係からすればここに当たるのは「除慚」であろう。当該経での否定辞は「莫」であることが多いので、ここでも否定辞はないと見られる。『菩薩地』も utsāhayatā、『声聞地』も utsāhayann と、共に否定辞を欠く。ただ、『釈軌論』を念頭に置いていたと思われる『菩薩地解説』は、否定辞を有する（BBhVy, Yi 127b3-4: spro bar mi byed pa. なお、本論書が別の箇所で『釈軌論』を引用していることは拙著でも指摘した。この箇所でも『釈軌論』の解釈を下敷きにしつつ、『菩薩地』に説かれる 20 の項目を解釈している）。

このように、出典や対応文献のこの箇所に否定辞がないとなると、世親が伝承した阿含が否定辞を有していたか、あるいは、〔より可能性は少ないが、〕世親が註釈するに当たり付け加えた可能性がある。

これを考えるにあたって注意したいのが徳慧注である。徳慧は、この箇所の註釈で「称賛と、非難も知るべきである。称賛と非難も知った上で、称賛もしてはならない。非難もしてはならない」という経文を引く。『無諍経』のパーリ対応経（次注参照）では「称賛を知るべきであり、また非難を知るべきである。称賛を知り、また非難を知り、称賛することもなく、非難することもなく、法のみを説くべきである」（*Araṇavibhaṅgasuttaṃ*, MN（No. 139), Vol. III. 230.15-17: ussādanañ ca jaññā apasādanañ ca jaññā ussādanañ ca ñatvā apasādanañ ca ñatvā n' ev' ussādeyya na apasādeyya dhammam eva deseyya. 和訳は片山［2002］による）とある。そして、同経ではこれについての詳説があるが、要点を抜き出せば、『下劣、粗野、凡俗の、聖ならざる、利益を伴わない、欲の結合を楽しむ、喜びの実践に耽っている者たち、かれらすべては苦しみがあり、害があり、愁いがあり、熱悩があり、邪に行道している』とこのように言いません。そうではなく、『耽ること、これは苦しみがあり、害があり、…熱悩がある法であり、邪な行道である』と、このように言い、法のみを説」く（ibid., 232.13-19: “Ye kāmapaṭisandhisukhino somanassānuyogaṃ anuyuttā hīnaṃ gammaṃ pothujjanikaṃ anariyaṃ anatthasaṃhitaṃ, sabbe te sadukkhā sa-upaghātā sa-upāyāsā sapariḷāhā micchāpaṭipannā ti” na evam āha. “Anuyogo ca kho sadukkho eso dhammo sa-upaghāto sa-upāyāso sapariḷāho micchāpaṭipadā ti” iti vadaṃ dhammam eva deseti.）、という趣旨である（和訳は片山［2002: 253］による）。これとは逆の、「正しい行道」（sammāpaṭipanna/sammāpaṭipadā）についても、同じようなことが言われている。

つまり、邪な行いをしている者（人）を非難するのではなく、また正しい行いをしている者を称賛するのでもなく、邪な行いとは何か、正しい行いとはなにかという「法」を説くというのが、「称賛もせず非難もせず」という意味である。日本でいえば「その人を憎まずしてその罪を憎む」というのが近いであろうか。その意図するところは、世親の『釈軌論』での記述に基づけば、誰が正しい行をしているのか、誰が邪な行をしているのかということ（＝「教化対象の特殊性」）は、〔その内面の実際のところは〕仏陀以外には判断のしようがないから、人についてその行を正しい・間違っているといって賞めたり非難してはいけないということであろう。

近年明らかにされている『瑜伽論』と世親の関係からすれば、世親は『菩薩地』や『声聞地』の記述も熟知していたと思われるが、以上の状況からすれば、世親はこのような『無諍経』経の経意の方に基づいて、この９番目の項目を否定辞を持ったものとして解釈しているといえよう。あるいは何らかの段階で否定辞が加わる伝承が登場したのであろうか。

18 nyon mongs pa med pa'i mdo: Skilling［2000］が指摘したようにパーリ対応経は MN 139, *Araṇavibhaṅgasutta* である（MA, 169）。

19 snying na ba: Negi では、snying na bar byed pa が hṛdayaparidahanī の訳語の例としてあげられている。『菩薩地解説』も先述のように『釈軌論』と同じく９番目の項目に否定辞を有し、『釈軌論』を下敷きにした解釈をしているが、そこの対応部分では「怒りを生ずる（khong khro ba skye bar 'gyur ba）」とある（BBhVy, D Yi 127b3）。

20 tshad ma: *pramāṇa. 徳慧は、直接知覚・推論・聖典という３つの正しい認識手段（量）に言及する。『釈軌論』も第３章でこれに言及している。

21 gzhan yang: これは単に（16）-（18）を別の観点から解釈したものに過ぎない。善に直面している者には慈心をもって、不善に直面している者には利益心をもって、どちらでもない者には悲心をもって説法するという解釈がここで施されている。Lee［2001］のようにこれ以降を（２）と段落分けする必要はない。なお、同校訂本は、（10）mi smad pa をその直前の（９）spro ba mi bskyed pa と合わせて一つに計上しているため、それ以降に関して、項目の計上の仕方が適切ではない。

22 tha mal pa dag: 様々な梵語の訳語でありうるが、ここでは*udāsīna の訳と見ておく。Negi, s. v. tha mal pa は、悲（karuṇā）が、どちらでもない者（udāsīna）と敵の立場にある者に対しても働くことを述べる用例を拾っている。

23 lhag par yid ches pa.

24 lnga lnga dag gis: 世親は経節に説かれる説法の 20 のあり方を、1～5 は「1 どのように」説くべきであるのかを説明したもの、といったように、5つずつセットのものとして解釈している。

25 don 'thad pa med pa: 徳慧によればこれの対治が「(11) 道理に適い」である。

26 mi 'tsham par: 徳慧によればこれの対治が「(15)〔聴〕衆に合わせて」語るということであるので、この語を、聴衆に合わないという意味で、「適切ではないこと」と理解した。

27 世親自身は［8］～［10］の項目が 20 のあり方のどれに対応するかを説いていないが、徳慧によれば、順に、「(13) 混ざらず、(14) 法に従い、(15)〔聴〕衆に合わせて」に対応する。

28 nyon mongs pa can gyi bsams/bsam: Lee［2001］は bsams を採るが、以下でこの語が解説されるときには諸版に bsam とあり、徳慧注にも支持されるので、bsam を採る。

29 3つとは、20 のあり方の内、(3) 順に、(4) 関連して、(5) 随順してという 3 つを指すのであろう。その 3 つが、それぞれ、説示と、論難の言葉と、回答の言葉に関して、という解釈。

30 Cf. AKBh, zhe 'gras dang bar mar gnas pa, pratihata-madhyasthāna（『倶舎論索引第三部』による）

31 能力の劣った者に、境界ではないこと＝甚深な意味を説いてはならないということ。徳慧によればこれの対治が「(12) 伴い」。

32 徳慧によればこれの対治が「(19) 利得や尊敬や名声に依存せず」。

33 徳慧によればこれの対治が「(20) 自賛せず他人をけなさず」。

34 「第 1 の」とは、徳慧によれば、「(i) 信じさせようとする考え」を指す。その対治として (16)～(18) が配当される。

35 徳慧によれば、涅槃を理解させようとする心が「慈心」であり、それ（涅槃）に至る道を理解させようとする心が「利益心」であり、解説した意味を理解させようという心が「悲心」である。

36 bskyod pa: 説法者に対して説法を強いるといったような事態を指すか。注 39 も参照。

37 snying na ba: 自分の信念・宗派とは違う立場のことを述べられることにより腹を立てるということであろう。

38 sun ci phyin du brgal ba: Lee［2001］は DC に従い sun phyin ci log を採るが、ここは P 等に従い sun ci phyin を採るべき。徳慧注では諸版がそうなっている。Cf. Negi. sun ci phyin du rgol ba, viṭaṇḍā（詭弁、難癖）。

39 nang du yang dag 'jog: Negi では pratisaṃlayana（〔瞑想のために〕退く）等が対応語としてあげられている。また、徳慧によれば、この主語は説法者である。このばあい、BHSD が、*Lalitavistara* (S. Lefmann ed., 1902), 161.9-10: ayaṃ kālo dharmadeśanāya, ayaṃ kālaḥ pratisaṃlayanasya の用例を挙げているのが注意される。同書の前後の文脈から見れば pratisaṃlayana は dharmadeśanā とは逆の意味と捉えられるので、この語の意味は、説法者が説法をするための用意をしていない、説法をするために前に出てきてはいない、という意味での「退いている」であろう。現に、徳慧は、先述の『ka tya'i bu mo smyug ma can 経』を引き合いに出している。そこではウダーイン長老が、聞法の態度のなっていない者に、今は時期ではないといって説法しなかったのであった。

40 『菩薩地解説』では、説法者を善知識（*kalyānamitra）であるとして注意を向けない過失（D Yi 125a4）。

41 chos smra ba la: 説法者の過失に注意を向けるということ。

42 ［7］と［8］を 4 つに分けて解説している。

43 'dun pa: 徳慧は、「意欲とは、なそうと欲することによって（'dun pa ni byed par 'dod pa nyid kyis so//）」という。Cf. AKBh, 54.21: chandaḥ kartukāmatā; AKBh (t), 'dun pa ni byed 'dod pa'o//

44 'jug pa: 徳慧は、「心的努力（〔意を〕傾けること）とは、注意を向けることである（'jug pa ni yid la byed pa'o//）」という。Cf. AKBh, manaskāraś cetaḥ　ābhogaḥ, AKBh (t): yid la byed pa ni sems kyi 'jug pa'o// 前注と共に、斎藤他［2011］（それぞれ 57-58, 65-66）を参照。

45 徳慧によればこれの対治として、順に、(1)～(3) の聞法のあり方がある。なお、世親は［2］と［3］について配当しないが、徳慧によれば、順に (4) と (5) の聞法のあり方に配当される。

46 徳慧によれば、この 5 つに対し、順に (7)～(11) が配当される。

47 法とは仏教であり、それは出離（輪廻からの超越）をもたらすものである。それを出離をもたらすものではないと逆に理解するから、逆しま（mi mthun pa）というのであろう。

48 徳慧によれば、この 5 つに対し、順に (12)～(16) が配当される。

Text: *Vyākhyāyukti* Ch.II. Sū (62)–(63)

(D 63a5–, C shi 65a6–, P si 74a2–, G si 91b2–, N si 67a6–)

Sū (62)

rnam pa nyi shu po 'di dag dang ldan pas gtam bya'o [1]

zhes bya ba ni mdo sde'i dum bu'o//

[I] de la (1) dus su zhes bya ba ni nyan 'dod pa nyid dang bshad pa'i 'os su gyur pa nyid du shes nas te/ ka tya'i bu [2] mo smyug ma can bzhin no// (2) bsgrim pa [3] zhes bya ba ni brnyas pa med pa ste/ seng ge mchong ba [4] bzhin no// (3) go rims [5] zhes bya ba ni dus (**C65b**) sngar bya ba sbyin pa la sogs pa dang/ yang dag phul can gyi gtam las brtsams nas so// (4) mtshams sbyar ba zhes bya ba ni mdo sde [6] rnam par bshad pa las brtsams (**N67b**) nas so// (5) rjes su mthun pa zhes bya ba ni dri [7] ba lung bstan pa las brtsams nas te/ mgo gcig tu lung bstan pa la sogs pa rnams la de bzhin du lung ston pa'i phyir ro//

(6) dga' bar bya ba ni dad pa can rnams la'o// (7) 'dod par bya ba ni sngar gnas pa dang zhe 'gras pa rnams la'o// (8) mgu bar bya ba ni the tshom can rnams la'o// [8] (9) spro ba mi bskyed pa dang (**D63b**) (10) mi smad pa ni gang su dag 'di 'dra ba thams cad ni yang dag pa la zhugs pa dag go zhe 'am/ log pa la zhugs pa dag go zhes bya ba lta bu ste/ ji skad du **nyon mongs (G92a) pa med pa'i mdo** las gsungs pa lta bu ste/ [9] gdul ba'i [10] khyad par mngon par mi shes pa de lta bur byed pa ni des gdul ba ma yin pa rnams snying na bar (**P74b**) 'gyur ro//

(11) rigs [11] pa ni tshad ma dang mi 'gal ba'i phyir ro// (12) 'brel pa ni snga phyi 'brel pa'i phyir ro// (13) ma 'dres pa ni gtam gzhan du 'phro ba spangs pa'i phyir ro// (14) chos dang ldan pa ni dge ba dang mthun pa'i phyir ro// (15) 'khor ji lta ba bzhin ni gdul ba dang 'tsham pa'i phyir ro//

(16) byams pa'i sems ni nyan pa po bde bar smon [12] pas so// (17) phan pa'i sems ni de la nyon mongs pa med par smon [13] pas so// (18) snying brtse ba'i sems ni de la sdug bsngal med par smon [14] pas so// (16'–18') gzhan yang dge ba dang mi dge ba la phyogs [15] pa dang/ tha mal pa dag la byams pa la sogs pa'i sems kyis [16] te go rims [17] bzhin no// (19) rnyed pa dang bkur sti dang [18] tshigs su bcad pa la [19] mi brten [20] pa ni de 'dod pa nyid spangs pas so// (20) bdag la bstod par mi bya zhing gzhan la smad par mi bya ba ni smra ba po nyid kyis [21] bdag la lhag par yid ches par byed 'dod pa nyid spangs pas so//

de ltar na ji lta bur dang/ gang gi don du dang/ gang 'dra ba dang/ gang 'dra bas gtam bya ba de lnga lnga dag gis yongs su bstan to//

[II] **lung** las ni

skyon bcu gcig gi gnyen por gtam rnam pa nyi shu dang ldan pa'o [22]

zhes 'byung ngo// (**C66a**)

skyon bcu gcig ni [1] snod ma yin pa la (**N68a**) brjod pa'i skyon dang/ [2] brjod (**G92b**) pa yongs su ma rdzogs pa'i skyon dang/ [3] brjod pa bar chad pa'i skyon dang/ [4] brjod pa go bar mi byed pa'i skyon dang/ [5] brjod pa mchod par mi 'gyur ba'i skyon dang/ [6] don 'thad pa med par brjod pa'i skyon dang/ [7] spyod yul ma yin pa brjod pa'i [23] skyon dang/ [8] rnam par g-yengs nas brjod pa'i skyon dang/ [9] don med pa dang ldan pa brjod pa'i skyon dang/ (**P75a**) [10] mi 'tsham par brjod pa'i skyon dang/ [11] nyon mongs pa can gyi bsam [24] pas brjod pa'i skyon no//

de la [1'] snod ma yin pa ni spyod lam mi sdug par 'dug pa'o// [3'] brjod pa bar chad pa'i skyon gyi gnyen por ni go rims [25] la sogs pa rnam pa gsum po dag yin par rig par bya ste/ bstan pa dang/ rgol ba'i tshig dang/ lan gyi tshig gis dbang du mdzad nas so// [4'] brjod pa go bar mi byed pa'i skyon gyi gnyen por drug pa dang/ bdun pa dang/ brgyad pa dag ste/ dad pa can dang/ zhe 'gras pa dang/ bar na gnas pa'i dbang du mdzad nas so// [5'] brjod pa mchod par mi 'gyur ba'i skyon gyi gnyen por dgu pa dang bcu pa gnyis te/ sdig pa'i las can la ni spro ba bskyed par 'os pa ma yin la/ smad na yang mchod par mi 'gyur ba'i skyon du 'gyur bas so// [7'] spyod yul ma yin pas ni don zab [26] mo ste/ dbang po tha ma la'o// [11'] nyon mongs pa can gyi bsam pa ni rnam pa gsum ste/ [i] yid ches par bya ba'i bsam pa dang/ [ii] dad nas bkur sti [27] byed pa'i bsam pa dang/ [iii] phrag dog gi bsam pa'o// [i'] dang po'i gnyen por byams (**G93a**) pa dang/ phan pa dang/ snying brtse ba'i sems kyi rnam pa dag ste/ mya ngan las 'das pa dang/ de'i lam rtogs par bya ba'i bsam pa nyid dang/ bshad pa'i don khong [28] du chud par bya ba'i bsam pa nyid kyis so//

[III] gzhan yang mdor na 'di las gtam gyi sbyor ba dang/ gtam gyi las dang/ (**C66b**) gtam gyi yon tan dang/ smra ba po'i yon [29] tan las brtsams nas rnam pa lnga lnga dag tu (**N68b**) rig par bya'o// (bam po bzhi pa//)

Sū (63) (D 64a6–65a3, C66b1–67a6, P 75a8–76a8, G si 93a3–94a4, N si 68b1–69a5)

rnam pa bcu drug po 'di dag dang ldan pas (**P75b**) chos mnyam par bya'o [30]

zhes bya ba ni mdo sde'i dum bu'o//

[I] de la rnam pa bcu drug po dag ni skyon rnam pa bcu gsum gyi gnyen po yin par rig par bya'o//

skyon rnam pa bcu gsum ni (1) smra ba po la bdag nyid kyis bskyod pa dang spyod lam gyi skyon dang/ (2) 'gying ba'i skyon dang/ (3) don du mi gnyer ba'i skyon dang/ (4) gzhan gyi phyogs byed pas snying[31] na ba'i skyon dang/ (5) mchod par mi 'gyur bas smra ba po rab tu mi 'dzin pa'i skyon dang/ (6) sun ci phyin[32] du brgal ba'i bsam pa'i skyon dang/ (7) chos dang chos smra ba la yid la mi byed pa'i phyir rim gro mi byed pa'i skyon dang/ (8) skyon yid la byed pa'i phyir brnyas[33] pa'i skyon dang/ (9) smod[34] pa'i skyon dang/ (10) rnyed pa dang bkur[35] sti 'dod pa nyid kyi skyon dang/ (11) rnam par g-yengs pa dang bsdus pa gnyis kyis[36] mi nyan pa'i skyon dang/ (12) legs[37] par yid la mi byed pa'i skyon dang/ (13) rab tu yid la (**G93b**) mi byed pa'i skyon dang/

de la nang du yang dag[38] 'jog pa'i tshe spyod lam gyi mi sdug pa'i phyir skyon dang po yin no// rigs mthon po nyid la sogs par nga rgyal 'byung ba'i phyir 'gying ba'i skyon no[39]// chos la ni yon tan dang legs par gsungs pa dang 'bras bu chen po nyid du 'o// chos smra ba la ni dge ba'i bshes gnyen nyid du'o// chos la skyon ni tshig dang yig 'bru ma 'brel pa nyid du'o// chos smra ba la ni tshul khrims dang/ rigs dang/ byad gzugs dang/ tshig dang/ tshig 'byin pa ma tshang ba nyid du'o// rnam par g-yengs pa ni sems[40] gzhan du 'phros pa'o// bsdus pa ni rmugs pa dang/ gnyid kyis sems zhum pa nyid du'o[41]// legs par yid la mi byed pa ni dgongs pa dang chos nyid la phyin ci log (**D76a**) pa nyid kyis so// rab tu yid la mi byed pa ni 'dun pa dang 'jug pa zhan[42] pa nyid kyis so// (**C67a**)

[II] **lung** las ni

skyon rnam pa drug gi gnyen por rnam pa bcu drug dag yin no

zhes 'byung ste/

skyon drug[43] ni [1] las kyi skyon (**N69a**) dang/ [2] mos pa med pa'i skyon dang/ [3] mchod par mi 'gyur ba'i skyon dang/ [4] bsam pa'i skyon dang/ [5] mi mthun pa nyid kyi skyon dang/ [6] 'dzin pa'i skyon no//

de la [1'] las kyi skyon ni rnam pa gsum ste/ (i) lus kyi las kyi skyon ni spyod lam mi sdug[44] par 'dug pa'i phyir ro// (ii) lus dang ngag gi skyon ni de gnyis kyis skul bar mi byed pa'i phyir ro// (iii) yid kyi las kyi skyon ni nyan par[45] mi 'dod pa (**G94a**) nyid kyis so// [4'] bsam pa'i skyon ni gzhan la klan ka btsal ba dang/ 'di lta bu zhig tu rgol ba las thar bar bya ba'i bsam pa nyid kyis so// [5'] mi mthun pa nyid kyi skyon ni rnam pa lnga dag ste/ (i)~(ii) de la chos la ni nges bar 'byin pa ma yin par go ba nyid kyis gus pa med pa dang/ tshig dang yi ge ma 'brel[46] pa nyid kyis brnyas pa'o// (iii)~(iv) gang zag la ni tshul khrims dang/ tshig dang/ tshig 'byin pa'i skyon gyis gus pa med pa dang/ rigs kyi skyon gyis brnyas pa'o// (v) khong du chud pa dang sgrub[47] pa'i nus pa mi 'byung snyam pa'i bdag nyid la brnyas pa'o// [6'] 'dzin pa'i skyon yang rnam pa lnga ste/ (i) log par 'dzin pa dang/ (ii) don mi 'dzin[48] pa dang/ (iii) tshig 'bru mi 'dzin pa dang/ (iv) brda ma sprad par 'dzin pa dang/ (v) ma lus par mi 'dzin pa'o//

lhag ma ni go sla ba'i phyir rnam par ma phye'o//

---

1 『広義法門経』(T1. 919c9-15): 長老。能説比丘、若欲為他説於正法与法及義相応、此語応説。謂恭敬、次第、相摂、相応、生他歓喜、及以欲樂、満足、正勤、不損悩他、所説如理、相応、無雑、随順聴衆。此言応説：有慈悲心、有利益心、有随樂心、不著利養、恭敬、讃歎、若正説法陰時、不得自讃自高、不得毀呰他人。

＊本訳では説法のあり方については、聞法のあり方が 16 と数を出しているのとは異なり、20 と数を出していない。ただ、大要は、諸本と一致する。

『普法義経』(T1.922b20-29)：若経欲説異人者、当為是二十品説。何等為二十。一為善説。二為多説。三為前後説。四為次第説。五為歓喜説。六為可説。七為解意説。八為除慚説。九当為莫訶失説。十為調説。十一為応説。十二為莫散説。十三為法説。十四為随衆説。十五為等意説。十六為助護意説。十七為莫窮名聞故説。十八為莫利事故説。十九為莫従説自現。二十莫従説調余。若賢者比丘、欲為余人説、当為是二十品説。

Arthvi, D sa 188b6-189a1, P śu 198a4-:

tshe dang ldan pa dag smra ba'i dge slong gtam smra bas gzhan dag la rnam pa nyi shus gtam bya ste/ 'di lta ste/ (1) dus su dang (2) gus pa dang/ (3) 'tsham pa (4) mtshams 'byor ba dang (5) rjes su 'brel (P 'bral) pa dang (6) ri mo dang/ (7) 'dod pa dang (8) mgu ba dang (9) spro ba dang (10) mi smod pa dang (11) rigs pa dang (12) 'brel pa dang (13) ma 'chol (P 'tshol) ba dang [(14) chos dang ldan pa?, DP om.] (15) ji lta ba bzhin gyi (P om. gyi) sems dang (16) phan pa dang/ (17) phan pa'i sems dang (18) snying brtse ba'i sems dang (19) rnyed pa dang bkur sti dang tshigs su bcad pa la mi brten (P rten) par bya'o// gtam de dag smra ba na (20) bdag la bstod par mi bya/ gzhan la smod par mi bya bar gtam bya'o//

＊ Arthvi も、20 という数字を出しているものの、きれいに 20 には分かれない。諸版と合わせて 20 にするという措置をあえて採るならば、(14) として chos dang ldan pa があってほしいところ。また、(16) の phan pa は byams pa とあってほしい。あるいは、(14) を付け加えずに 20 項目にするならば、(20) を 2 つに分けることが考えられようか。

Sūśa, D shi 23a3–6:

tshe dang ldan pa dag dge slong chos smra ba bos (VyYT sgrogs pas) chos kyi gtam byed pa na rnam pa nyi shu po 'di dag dang ldan pas gtam bya ste/ (1) dus su dang/ (2) gus pa dang/ (3) go rims dang/ (4) 'tshams sbyar ba dang/ (5) rjes su mthun pa dang/ (6) dga' bar bya ba dang/ (7) 'dod par bya ba dang/ (8) mgu bar bya ba dang/ (9) spro ba mi (VyYT om. mi) skyed pa dang/ (10) mi smad pa dang/ (11) rigs pa dang/ (12) 'brel pa dang/ (13) ma 'dres pa dang/ (14) chos dang ldan pa dang/ (15) 'khor ji lta ba bzhin dang/ (16) byams pa'i sems dang/ (17) phan pa'i sems dang/ (18) snying brtse ba'i sems dang/ (19) rnyed pa dang/bkur sti dang tshigs su bcad pa la mi rten pa dang/ (20) gtam de dag brjod pa na bdag la bstod par mi bya zhing gzhan la smad par mi bya la gtam yang bya ba ste/ rnam pa nyi shu po 'di dag dang ldan pas gtam bya'o

2 PGN nu
3 Sūśa: gus pa
4 DPGN mchong ba, CL mchod pa
5 PG rim
6 G sde'i
7 PGN 'dri
8 D om. mgu bar ~ rnams la'o//
9 C bu'o//
10 PGN bar
11 PGN rig
12 PGN smos
13 PGN smos
14 PGN smon
15 DC sogs; cf. VyYT: phyogs
16 PGN kyi
17 PGN rim
18 PGN om. dang
19 PGN om. la
20 N bnyen
21 PGN kyi
22 DPGN pa
23 C pa ji
24 CL bsams
25 PGN rim
26 PGN bzang
27 C ste
28 PGN om. khong
29 P yo
30 Cf. Arthvi, D 189a1–4, P 198a7–198b1:

tshe dang ldan pa dag chos nyan par 'dod pas rnam pa bcu drug gis mnyan par bya ste/ 'di lta ste/ (1) dus su chos mnyan par bya ba dang/ (2) bkur stir bya ba dang/ (3) gus par nyan pa dang/ (4) ma rangs pa med pa dang/ (5) bsgo ba bzhin nyan pa dang/ (6) klan ka mi tshol ba dang/ (7) chos la gus par bya ba dang/ (8) chos smra ba'i gang zag la gus par bya ba dang/ (9) chos la mi brnyas pa dang/ (10) chos smra ba'i gang zag la mi brnyas pa dang/ (11) bdag la mi brnyas pa dang/ (12) rtse gcig pa'i sems dang/ (13) kun shes par bya ba'i sems dang/ (14) rna (D ins. ba) blags te mnyan pa dang/ (15) sems bsdus te (16) sems thams cad kyis bsams te chos (D ins. la) mnyan par bya'o//

Sūśa, D shi 23a6–23b2:

tshe dang ldan pa dag chos mnyan par 'dod pas ni/ rnam pa bcu drug dag dang ldan pas chos mnyan par bya ste/ (1) dus su chos mnyan par bya ba dang/ (2) gus pa dang/ (3) nyan par gus pa dang/ (4) ma rangs pa med pa dang/ (5) bsgo ba bzhin byed pa dang/ (6) klan ka mi tshol ba dang/ (7) chos la gus pa nye bar (D24b) gzhag pa dang/ (8) gang zag chos smra ba la gus pa nye bar gzhag pa dang/ (9) chos la brnyas pa med pa nyid dang/ (10) gang zag chos smra ba la brnyas pa med pa nyid dang/ (11) bdag nyid la brnyas pa med pa nyid dang/ (12) kun tu shes par bya ba'i sems dang/ (13) sems rtse gcig tu bya ba dang/ (14) rna blags pa dang/ (15) sems kun tu btud pa dang/ (16) sems thams cad kyis bsams nas chos mnyan par

bya ste/ tshe dang ldan pa dag rnam pa bcu drug po 'di dag dang ldan pas chos mnyan par bya'o zhes bya ba ni mdo sde'i dum bu yin no//

＊ Arthvi と Sūśa で、(12)と(13)の順序が逆になっている。

『広義法門経』(T1.919c15-22): 長老。若人欲聴正法、具十六相、乃可聴受。何等十六。一随時聴、二恭敬、三欲楽、四無執著、五如聞随行、六不為破難、七於法起尊重心、八於説者起尊重心、九不軽撥正法、十不軽撥説者、十一不軽己身、十二一心不散、十三欲求解心、十四一心諦聴、十五依理正思、十六憶持前後、而聴正法。

『普法義経』(T1.922c1-8): 舎利弗復謂比丘。欲聞法者、当有十六業。何等為十六。一当為有時可聞、二当為多聞、三当為向耳聴、四当為事、五当為莫平訶、六当為莫訶失、七当為莫求長短、八当為法恭敬、九当為説法者恭敬、十当為莫易法、十一亦莫易説法者、十二亦莫自易身、十三一向心、十四莫余意、十五正持心、十六覚一切念、可聞法正。

BBh, (Ch.VIII.balagotra), 104.17-105.9:

sa evaṃ upasaṃkramaṇasaṃpannaḥ asaṃkliṣṭaś ca dharmaṃ śṛṇoty avikṣiptaś ca/ katham asaṃkliṣṭaḥ śṛṇoti/ staṃbhasaṃkleśavigato 'vamanyanāsaṃkleśavigataḥ layasaṃkleśavigataś ca/

tatra ṣaḍbhir ākāraiḥ staṃbhasaṃkleśavigato bhavati/ caturbhir ākārair avamanyanāsaṃkleśavigato bhavati/ ekena ākāreṇa layasaṃkleśavigato bhavati/ (1) kālena śṛṇoti (2) satkṛtya (3) śuśrūṣamāṇo (4) na asūyann (5) anuvidhīyamānaḥ (6) anupāraṃbhaprekṣī/ebhiḥ ṣaḍbhir ākāraiḥ staṃbhasaṃkleśavigataḥ/ (7) dharme gauravam upasthāpya (8) dharmabhāṇake pudgale gauravam upasthāpya (9) dharmam aparibhavaṃ (10) dharmabhāṇakaṃ pudgalaṃ aparibhavan ebhiś caturbhiḥ ākārair avamanyanāsaṃkleśavigataḥ śṛṇoti/

(11) ātmānam aparibhavaṃ śṛṇoti/ anena ekena ākāreṇa layasaṃkleśavigataḥ śṛṇoti/ evaṃ hi bodhisattvaḥ asaṃkliṣṭo dharmaṃ śṛṇoti/

tatra kathaṃ bodhisattvaḥ avikṣipto dharmaṃ śṛṇoti/ paṃcabhir ākāraiḥ/ (12) ājñācitta (13) ekāgracittaḥ (14) avahitaśrotraḥ (15) samāvarjitamānasaḥ (16) sarvacetasā samanvāhṛtya dharmaṃ śṛṇoti/ evaṃ hi bodhisattvaḥ śrutaṃ paryeṣate/

(翻訳は省略するが、『菩薩地』は、16 の聞法のあり方を、大きく、A) 雑染(心の汚れ)なく聞く、B) 散乱せず(心乱れず)に聞くことに分ける。さらに、A) 雑染なく聞くことというなか、「雑染」とは、頑固さ、軽蔑、落ち込みという 3 つとする。それらを離れて聞くことが、順に、1〜6、7〜10、11 の項目で示されていると解釈する。そして、B) 散乱せずに聞くことに、12〜16 の 5 つの聞き方(あり方)を配当する。)

31 C snyeng
32 PGN sun ci phyin, DCL sun phyin ci log
33 PGN bsnyas
34 C smon, P smrad
35 P mkur, N bskur
36 PGN kyi
37 PGN len
38 PGN om. dag
39 C dang
40 P sams
41 PGN do
42 C zhen, L nyan
43 PGN ins. dag
44 N btsug
45 DC nyan par, PGN nye bar
46 ma 'brel, L mang brel
47 N bsgrub
48 mi 'dzin: L ming dzin